

【これまでのあらすじ】

降る雨の九七%が人をも融かす酸性雨と化し、十年前の「第二次世界大天災」による被害が色濃く残る2XXX年の東京。A.C.I.D.(対天災国際防衛省)に所属する十七歳の青年・天海快晴は、天災を引き起こす怪物「天魔」を狩る「調停士」として、自身の平穏な生活を奪った天災への復讐のため、日夜天魔との戦いに身を投じていた。時は六月某日、天海の後輩で新人の日暮風沙は、着任早々梅雨の膨大な業務量に忙殺されていた。そんな中、戦闘に赴いていた天海が通信を繋ぎ、「日暮を現場へ向かわせてほしい」と告げる。

【主な登場人物】

天海快晴《あまみかいせい》……天災を起こす怪物、天魔を討伐する組織《A.C.I.D.》の戦闘員『調停士』である十七歳の青年。妹の照を溺愛している。十年前の《第二次世界大天災》により左目の視力を失っており、眼帯を付けている。

天海照《あまみてる》……快晴の妹。《第二次世界大天災》で被災した後遺症が遺っており、基本的に《A.C.I.D.》

東京支部の医務室にて保護管理下に置かれている。

神宮寺陸斗《じんぐうじりと》……天海快晴ら調停士の戦闘等をサポート・バックアップする調停士補佐官。東京支部全体の副隊長でもある。天海兄妹とは古くからの付き合い。

日暮風沙《ひぐれなぎさ》……東京支部の新人調停士兼メカニック。機械いじりとかわいいのが好き。快晴とは研修生時代に師弟関係にあったことがきっかけで、一方的に恋心を抱いている。

* * *

メカニック
整備士の業務に忙殺されていた風沙だったが、戦地に

いた天海快晴からの呼び出しを受け、たまたま近くに

いた神宮寺の運転により現地へと向かっていた。

「本所属になって早速、名指しでの呼び出しとは。進展が速いですね」

「かつ、からかわないでくれる？ 進展とかなんとかって話は一切合切ないですってば」

口では否定する風沙だが、相変わらず天海の話になる

と顔や耳が赤くなる。咎めるわけではないが、あまり色恋沙汰に躍りになって本来の業務に支障をきたすようなことがないといいが、と神宮寺は密かに思った。

「……話を逸らすわけじゃないですが」意図がバレバレの予防線を張りつつ、風沙が話し出す。

「すごいですね、ここ……際限なく雨が降ってて、まるで滝の中みたい」

ACI.D.で使用されている対天災用車両、略して「天車」

は、屋根に取り付けられた大きな傘だけではなく、雨を弾く塗装や、今回のように特に強い雨風に対しては小規模な快晴出現空間――「晴域」を展開することで、悪天

候の中でも活動ができるようになっていた。そのため、ドーム状の快晴空間の外に、滝のように降り注ぐ雨粒の

様子がありありと見て取れるのだった。

「梅雨ですからね。一体一体の天魔がそこまで強くなくとも、数が集まりますから。塵も積もれば何とやら、です」

「塵というには規模がデカすぎる気もするんだけど……不安そうに上空の分厚い雲を眺め、風沙は呟く。訓練

中にも模擬戦のようなものはあったにせよ、彼女にとつてはこれが本入隊してからの初めての実戦であった。自らの生死がかかっているのだと意識してしまうと、否が

応にも身体が強張ってしまう。

「そんなに怖い顔しなくても、大丈夫ですよ。天海さん含め、戦場では皆、頼りになる人達ですから」

神宮寺はできる限り優しい声色でそう告げたが、そう簡単に表面上の緊張は崩れないようだった。そんな彼女を見かねてか、彼は軍服のポケットから一枚の紙を取り出し、風沙へ手渡す。

「……もし、どうしても困ったときには、そのアドレスと通話を繋げてください。……できれば、天海さんのいない所で」

「へっ？」

渡されるがまま受け取ってしまった風沙だが、その意味がわからず聞き返す。「どうして……っていうか、なんで紙で？ アドレス交換だったら、TelTel 同士を接続すればできるんじゃない？」

「悪いですが、詳しいことは言えません。あまり乱用されては困る、奥の手なので」

その気迫に押され、奥の手、とただ反芻する風沙。

「……まあ、天海さんはこれを使うことを嫌っている、ぐらいは言ってもいいでしょうか」

「……」

彼女も天海という男について詳しいわけではないので、その意味するところは想像もつかない。ただ、おそらく

はただ単純に事態を好転させるわけではない、何らかの副作用のある手段なのだ。風沙は直感した。

「ほら、貴方も無闇に想い人を困らせたくはないでしょう？」

冗談めかした神宮寺の物言いに、風沙は再び「からかわないでください！」と顔を赤くする。その反応に彼が笑い返したことで、風沙の表情もいくばくか解けていた。

『……マモナク、左方向。目的地周辺デス』

「おっと、もうそんな時間か」

天車が Tell-Tail のナビに従い、目的地に到着すると、そこには数人のレインコートを着た調停士たちが座り込んでいた。天車の姿を認めると、そのうちの一人が近寄ってくる。

「じゃあ、私はここで。本部に戻ったら通信を繋ぐと天海さんに伝えてください」

「はい、ありがとうございます！」

風沙はレインコートのフードを深く被ると、武器となる傘をしっかりと握り、一礼して車から降りる。「奥の手」が記された紙は、濡れないようにポシエットの中へと念入りにしまい込んだ。

* * *

車を降りてすぐ、彼女にとっては聞き覚えのある声で呼び止められる。彼女をこの場へ呼び出した張本人、天海快晴である。

「急に呼び出してすまなかった。頼みたいことがあるんだ」

「いえ、平気です。丁度、整備士の仕事が多すぎて嫌気が差してたところでしたし……」

後半は尻すぼみになりながらも、風沙は答える。「そうか」と、天海はさして彼女の返答は気にしていない様子で返した。

「それで、用ってなんなんですか？　すぐ来てほしいって言うから、何も聞かずに来ちゃいましたけど……」

言いながら、風沙ははっと青ざめ、自分の不用心さを呪った。正直なところ、単調な整備の仕事から逃れられればいいと思ったがゆえにホイホイと連れてこられてしまったが、もしかすると今からはそれ以上の重労働を強いられるのではないのか。何にせよ激務からは逃れられないのか。とんだブラック組織だな……などと思っていると、天海はようやく用件を告げた。

「撃ってほしいがある」

「……はい？」

ピンク色の傘の先端（石突）から放たれた光弾は、数十メートル先の上空に浮かぶ丸い物体のど真ん中を貫く。

「日暮」

穴の空いた物体は音を立てて急速にしぼむと、風船のように残った空気を撒き散らしながらあらゆる方向へ飛んでいってしまう。

「さすがだな。光線銃試験プラスチックの成績はBランクだっただけある」

「え……あ、ありがとうございます」

天海の口から唐突に褒めるような言葉が出たことに驚く風沙だったが、すぐに気を取り直して咳払いする。「ま、まあ、このくらい当然です。お茶の子さいさいです」

彼女が上官である天海から命じられたのは、この上空に浮かぶ灰色の風船のような物体——「偽体デロイ」というらしい——の狙撃および破壊であった。彼の部隊にももちろん狙撃の得意な者はいたのだが、その隊員が先ほど腕を負傷してしまったらしく、その代役として風沙が呼ばれたのだという。

「俺は生憎、精密射撃は不得意だからな。助かった」

そうなんですか、と言ってから、風沙の目はほぼ無意識に彼の左目を映した。そこには左右対称となる淡い水色の瞳はなく、黒い眼帯がそれを乱暴に覆っている。その背景について彼女は知り得てはいなかったが、天海の口調は悲観的でも羨望に満ちてもおらず、ただ淡々と事実を述べているだけのように感じられた。

「天魔の中には、自身の身代わりや牽制の道具として、こういった偽体を用いる種類もいる。こいつの降らせる雨自体は小雨程度なんだが、一般市民にとつて脅威であることには変わりないからな」

今回の災雲発生域は、比較的東京の市街地に近い範囲となっている。人々を天魔の引き起こす天災から守るのが調停士の、A.C.I.D.という組織の使命であり、そのためにはいかに小さな災禍の種であろうと放っておくわけにはいかない。

「悪いね、メカニックの仕事も今はめっちゃ忙しい時期だろうに。本当なら、ボクらで処理するべきなんだけど」

そう風沙を労うのは、青みがかったグレーの長い髪を強風に靡かせる、大人びた雰囲気の人物であった。水無瀬みなせ

亜真理あまり、と名乗った調停士は、天海と共に作戦に同行していた一人だった。ボク、と一人称を使っているが、おそらく女性だろう。黄金色に輝く切れ長の瞳に、深いブルーのアイシャドウを施したメイクがよく映えている。見た目や雰囲気からは、天海と同世代かやや上くらいの歳のように感じられた。

「というか、天海に妹さん以外の女の子の友達がいるなんて意外だったな。そもそも友達自体が少なそうだが」

「友達、というような関係性じゃない。数年前、訓練生だった彼女を俺が傘剣術の講師として教えていたんだが、この間偶然再会してな。その程度だ」

後半の言葉には特に反応せず、天海が返す。その程度、と言えはそれまでなのだが、本人の口からそう言われてしまうのは少しもやもやする風沙であった。

「今日が初実戦なんで、お役に立てるかわからなくて不安だったんですけど……動かない的を撃つくらいなら、全然楽勝です。いくらでもやりますよ」

「お、初陣か。いいねえ」

水無瀬がニヤリと笑い、風沙の肩を叩く。「最初は緊張すると思うけど、気楽にやんなよ。新人のうちはへマしてもボクたちがリカバってあげるからさ」

「あ、ありがとうございます！」

見た目だけ見るとキツそうな印象さえ受ける彼女（？）だが、案外と親しみやすくして面倒見の良い先輩のように感じられ、風沙は安堵した。その横にいる後輩の顔すらろくに覚えない輩にも少しは見習ってほしい、とも。

「……どうした？ 何故そんな目で俺を見ているんだ」

「いーえ。別に何も」

自分が言外の非難に遭っているとは夢にも思っていないような表情の天海から、風沙はぶい、と首を振って目を背ける。

「……よくわかんないけど、コミュニケーションの構築

は大事だよ？ 天海」

「なんで俺に問題があるのが前提なんだ」

やはり釈然としない様子の天海。と、そこへ彼の胸ポケットへ収まっていた Tell-Tel が、ひょっこり首を出して通信を受信する。

『天海、水無瀬、聞こえるか。こちらのエリアは掃討完了したぞ』

通信機を介して聞こえるやや野太い声は、風沙との合流後に別行動をしていた伊勢島狭いせしまさみ弥刀であった。天海た

ちの戦闘班は風沙を除き四人で、彼女が合流したことで二手に分かれ、天海たちは風沙の風船割りの見守りを、伊勢島らは天魔の残党を散らしていたのだった。

「了解した。こちらも終わり次第合流する」

『あつ、サミーばっかりずるいぞ。オイラも風ちゃん顔見たい！』

唐突に響いた温度差のある大きな声に、風沙はびくつと肩を震わせる。あどけなさの残る少年のような声は、いささかこの戦場には不釣り合いのようにも思えた。

『バカ、どうせお前はそのバケツで見えないだろ。初対面であの子に引かれたの覚えてねえのか』

ゴオン、と金属の鳴る音が響き、少年が批難の声を上げる。

『いったーい！ なにも叩くことないだろー』

先程までの堅い雰囲気から一転、通話越しの天海たちのところにも和やかな空気が流れ始める。しかし風沙は、確かに初見時のインパクトはあったものの、そのインパクトに流されてか教えてもらったはずの彼の名前は思い出せずにいた。

「……あの、天海先輩。あの、バケツの方って、何て名前でしたっけ……」

「ああ、なんだったか……やたら長つたらしい名前だったな」なぜか同じ調停士部所属のはずなのに首を傾げながら、天海は答える。「海藤。バルマミルク、だったか」

『一条ラムザ八久留！』^{やくる} せめて一音節くらいは覚えとけつての』少年は鼻息荒く訂正したのち、露骨に媚びたような甘い声で続ける。

『オイラのことはラムザでいいからね、風ちゃん。あとその天海とかいうこっわーいお兄ちゃんに酷いことされたらすぐオイラに頼っていいからな』

『「こっわーいお兄ちゃん」は、今のところラムザの方だと思っけど』

『こら、アマリ！ 余計なこと言うなって』

そういうえばそんな名前だったような気もするが、正直彼らに関して名前よりも見た目で覚えるほうが容易い。伊勢島狭弥刀は見たところ二メートルは軽く越していそうな巨漢で、開いているのかわからないほど目が糸のよ

うに細い。山のような背中に背負った傘も、彼女たちのよく知るものより二倍は大きく見えた。

対する一条ラムザ八久留は風沙とほぼ変わらないくらいの小柄な少年なのだが、何より目を引くのは顔を覆い隠すほど深く被った黒い鉄のバケツだった。覗き窓のよりに横に細長い穴は空いているものの、どう考えても視野は狭まっているだろうし、彼が動く度にガラガラと大きな音を立てるので、見ていてだけで煩わしくなる。さすがに初対面でいきなり理由を聞くのも憚られ、風沙には「謎のバケツの人」という印象のみが残った。風沙の姿を見るや否や求婚を始めたのには度肝を抜かれたが、伊勢島曰く「そういう性格なんだ」とのことらしい。

「……ともかく、俺たちも偽体^{デコイ}をあらかじめ片付けたら、そちらへ向かう。その時はまた連絡する」

そう言っつて、天海は通信を切る。先輩たちのおかげか、彼らの表情も通話前より和らいだものになっていた。

「んじゃ、ボクらもちゃっちゃと風船割りを終わらせようか。よろしく、風沙ちゃん」

「はい！ 任せてください」

風沙は頼られているのが嬉しいのか、傘を大きく振り上げコツコツと地を叩きながら、尻尾を振りながら歩く犬のように行進していく。

「可愛い子じゃん、天海」

「なんで俺に聞くんだ……？」

その後ろから水無瀬は保護者のように、天海は仕方なく連れられてきた兄のように、それぞれの表情を保ちながら歩いていくのだった。

* * *

「……はあ、疲れた。これだから雨の中の運転は……」

一方そのころ、風沙を送り届けた神宮寺は、ACID. 東京支部の基地内へと戻ってきていた。晴城で視界は晴れるといっても、晴城の先の景色が見えないことには変わりないため、豪雨の中の運転は精神を消耗するのだった。

レインコートを乾燥機にかけ、休憩室で一服してから業務に戻ろう、と考えた矢先、通りがかった医務室の扉が開くのが見えた。そこからゆっくりと出てきた人影は、

「……照さん？」

天海の妹である天海照が、ひどく顔色の悪い状態で姿を現した。彼女は十年前の第二次世界大天災で被災した後遺症が遺っており、基本的に医務室の中で過ごしている。こうして外に出てくることは食事やトイレなどの必要最低限の場合を除き、めったにないのだが。

「照さん、大丈夫ですか。手伝いましょうか」

「あつ、すみません……お願い、してもいいですか」

照は左手で口元を押さえ、右手を小刻みに震わせながら神宮寺のほうへ差し出す。彼はその細い手首を掴むと、彼女の歩幅を見定めながら慎重に歩き出す。

「ちよっと、お手洗いにいきたくて……あつ、もちろん、手前まで大丈夫です」

「了解です。速かったら言ってください」

虚ろな目で頷く照を見て、神宮寺がぼんやりと抱いていた既視感確信に変わった。しかしひとまずは、彼女を目的の場所まで連れて行くのが先だ。彼は照に声をかけながら、なんとか彼女が意識を保っていてくれるよう祈る。

女性トイレの目の前まで着くと、照は手すりを頼りに足を引きずるように進み、中へと入っていく。しばらく待つと、今度は頭を片手で押さえながらこちらへ戻ってきた。

「大丈夫ですか、照さん？」

「……はい。吐き気は、なんとか治まりました」

やはりか、と神宮寺は頭を垂れる。「……と、いうことは」

「はい。多分、気象病じゃないかと」

本人も症状は自覚していたようで、あっさりそう答えた。

気象病。それは、照がこの施設内で常に医務室で過ごしている理由の一つでもあった。

低気圧が近付く、つまり天候が悪くなると頭が痛くなったり、身体がだるくなったり、といった症状が出る人間は少なくない。そうした症状も一括りに気象病と呼ばれることはあるが、彼女のそれはさらに程度の重いものであった。酷い頭痛による吐き気や、喘息のような症状を起こすことがあったり、時には一時意識を失うような場合もあった。

さらに彼女の症状の厄介なところは、低気圧の接近がこれから起こるといったときに強く出やすい、という点だった。事前に発症の予測ができないため、長らく彼女自身もその周りも苦労している。

しかしこの性質を利用すれば、一種の予知能力のように用いることもできる。つまり――

「――ひと雨、来るかもしれないってことか」
神宮寺の言葉に照も頷き、伏した目で窓の外の雨雲を見やる。彼女の不安が向く先は言わずもがな、この豪雨を討伐しに向かった兄だろう。

「照さん、ひとまず医務室へ戻りましょう。私はその後で、天海さんにこのことを伝えておきます」
「わかりました。よろしく、お願いします」

僅かな会話だけでも息が続かないほど、照の呼吸が浅

くなっているのが見て取れた。神宮寺は急いで彼女の腕を取ると、先導して手を引きながら歩いて行く。

（症状の強さは、観測上、災雲規模の大きさ、近さに比例する。もしかすると――）

平静を装ってはいたが、神宮寺も嫌な胸騒ぎが収まらなかった。今はただ、何事もなくこの嵐が過ぎ去っていくことを、祈るしかなかった。

* * *

「よし、これで……十個！」

掛け声と共に発射された光弾が、風船を撃ち抜く。周囲にしつこく降り続いていた雨も、的の破壊と同時にぴたりと治まる。

「すごいな、風沙ちゃん！　ほとんど百発百中だったじゃん」

水無瀬に褒められ、まんざらでもなさそうに照れ笑いする風沙。その隣で「一発は外してたがな」と呟く天海に対してはノータッチで話が進む。

「……そういえば先輩、私が光線銃得意だったこととか、試験でSランクだったこととか、覚えていてくれたんですね……嬉しいです」

珍しく素直に、天海のほうをちらちらと見ながら風沙は告げる。

「ああ」天海はたった今思い出したことのように話した。「神宮寺が言ってたからな。覚えてはいなかったんだが、それで知った」

その直後、バキユン、と音を立てて天海の頭上スレスレを光弾が駆け抜けた。突然の出来事に、横にいた水無瀬も天海と風沙を交互に見返す。

「……そこは黙って「そうです」って言うっておけばいいのよ……余計な一言が多いんですってば」

「……？　そうか……すまない」

未だピンときていなさそうな天海を尻目に、風沙は水無瀬のほうへと近付き「そういえば向こうのお二人に報告しなくちゃですよ、先輩」とわざとらしい猫撫で声で言う。

「アハハ、風沙ちゃんって面白い子だね。じゃあそんな風沙ちゃんに免じて、ボクの Tell-Tel を繋いであげよう」

水無瀬は大層なもののように仰々しく Tell-Tel を取り出し、勿体ぶりながら通話を繋ぐ。もちろん向こうはそんな事情は知らないの、ワンコールで通話が繋がり、水無瀬は若干がっかりした顔をする。

「あっ、もしもし、日暮です。えっ……と、全ターゲットの破壊、完了しました」

『おう、ご苦労さん。もしもし、だってよ。可愛いな』
風沙はそこで友人と通話する感覚で任務の完了報告をしてしまったことに気付くと、ぼわっと顔を赤くし、「ち、違うんです、これはあ」としどろもどろに言い訳を始める。

『大丈夫だよ、風沙ちゃん。新人のうちは何もかも分からなくて当然さ』

「まーたイケメンムーブで気を引こうとしてるー。新人ちゃんのピュアさに付け込むのはよくないと思うけどー」

『そそそ、そんなわけないだろっ！？　な、サミー！？』
『どうだか。お前いつもそんな調子だから女の子に信用されないんだろ』

『なにをー！』

わちゃわちゃと遠慮なしに言い合い、笑い合う彼らは、とても生死を賭けた戦地にいる人間とは思えなかった。調停士、というの、もっと皆厳格で、馴れ合いなど必要としない、傭兵のような人達なのだろうというイメージを持っていった風沙だったが、たった一日でそのイメージは見事に覆された。もちろん、天海のように彼女のイメージ通りの調停士もいるのだが、その天海でさえも会話の輪の中にいる時は、少しだけだがリラックスしたような表情をしている。それが彼女にとって意外でもあり、また喜ばしいことにも思えた。

彼らとなら、また戦場へ出てきてもいいかーそう、

心の中で思いが芽生えた、

その時だった。

突如、通話の向こう側で地響きのような音が鳴り、通信の音声にノイズが混ざり出す。

『え、っ——』

さっきまでの騒がしさが嘘のように、静寂が訪れる。

いち早く我に返った天海が、Tell-Telに呼びかける。

「おい、大丈夫か！？ 何があった！」

『……っ、天海！ ——乱雲、だ』

途切れ途切れではあるが、緊迫した様子の伊勢島の声が届く。

『——局地的集中豪雨が、来る』

* * *

局地的集中豪雨、俗にはゲリラ豪雨とも呼ばれるそれは、突発的に発生する局地的な大雨のことを指す。小さな災雲が複数集まっている、というのは梅雨の一般的な傾向と同じなのだが、それが重なるように一カ所に集まることで一つの大きな災雲のように作用しているのがゲリラ豪雨の災雲である。通常、災雲の発生は小さな段階から形成が始まるためある程度の予測が可能なのだが、この性質のために発生を予測することが難しく、避難や

対応の遅れた市民に多大な被害をもたらすことがある。

天海は舌打ちし、通話を切り替える。「おい、神宮寺、聞こえるか。ゲリラだ」

『はいはい、今把握してます……っつと、出ました、今座標を送ります』

神宮寺から提供されたマップ情報を Tell-Tel が読み込むと、すぐに機械音声での案内が開始される。

『ゲリラ災雲、ココヨリ南東ノ方角デス。ナビゲーションヲ開始シマス』

ナビの指示に従い、天海たちは走って災雲の発生地へ向かう。ゲリラ豪雨は性質上、複数の天魔を同時に相手

取ることになる。こちら側もなるべく頭数が欲しいのだ。

「水無瀬、伊勢島らとの通信はそのまま、向こうの声を聞いていてくれ。異変があったらすぐに教えろ」

「了解。進路はそっちに任せるから、迷わないでよ」

天海の指示で水無瀬が最後尾に移り、風沙がそこに挟まれる形となる。風沙は天海に置いていかれないように、必死に前方の背中を追いかける。

『……っそ、数が多い！ 晴域の外……ら仕……てくるのは厄介だな』

スピーカー越しにはラムザ達の声に混じり、戦闘の雑音が聞こえてくる。戦国時代の戦のように、金属を突き合わせる音、無数の足音、雄叫びと断末魔が飛び交っていた。

『彼らは丁度、反対側からこの災雲を攻めているようです。合流するのには遠回りが必要かもしれません』

「いや、このまま向かう。挟み撃ちのほうが、攻め落とすには効果的だ」

えっ、と言葉を詰まらず神宮寺。『それはそうかもしれないませんが、相手は数が――』

「どつちにしたって数的には不利だ。ジリ貧になる前に、双方から攻めて親玉を叩く。そのほうが早く終わる」

ゲリラ豪雨のような災雲の集合体には、それを取りまとめる親玉と呼ばれる天魔が存在する。いわば群れを統括するボスのようなもので、多くの場合はその個体を倒せば、他のザコ個体は統率を失って散り散りになる。しかし厄介なのは、大抵の場合親玉はザコに取り囲まれるような形で雲域の中心部におり、また他の個体よりも強大なものであることが多い。当然群れの中心たる親玉をみすみす失うわけにはいかないのだ、周囲の天魔たちも親玉を守るように調停士たちに襲い掛かってくる。親玉の撃破は、言うほど簡単なことではない。

「伊勢島、七堂、俺らは反対側から群れを攻める。お前たちも中心部へ向かってくれ、挟み撃ちにする」

『……わかった。無理はするなよ』

『一条！……条ラムザ八久留だ……ての！』

二人に指示を飛ばしたところで、ようやく前方にもくもくと立ち上る積乱雲が見えた。圧倒されそうな一面の

曇天に、風沙はごくりと息を飲む。

『半径は四キロメートル前後、小さい分かなり天魔が密集していると思われます。兎にも角にも、気を付けてください』

「ああ。……日暮、いけるか？」

実戦が初めてとなる風沙のほうを振り返って、天海が尋ねる。

「は、はい！」 風沙は顔や体を硬直させつつも、間髪入れずに答えた。

「わかった、日暮は俺に近付いてくるザコを蹴散らしてほしい。水無瀬、お前は日暮を守りながら進んでくれ。護衛は得意なんだから」

「勿論。風沙ちゃん、大船に乗ったつもりでいいからね」

そう言っただけで水無瀬は背中に背負った大ぶりの傘を取り出した。伊勢島の大傘とも似ているが、こちらは全体的に細身で、布地の部分が丈夫にできている。

「よし、それじゃあ――突入するぞ」

天海の言葉を合図に、三人は胸元のバッジを起動し、暗域を形成する。その状態で雲域の中へ入ると、雨の中を縦横無尽に闊歩する怪物どもの姿が視界に映る。

「ひいっ……！」

その地獄のような光景に、風沙は思わず身を竦ませる。しかし天海と水無瀬はさほど気にすることもなく、狩り

のスイッチが入った獣のように、ただその中心部へと狙いを定めていた。

「グアアア……！」

すると、侵入者の気配に気付いたのか、さまざまな相貌の怪物たちがうめき声を上げ、彼らにおどろおどろしい双眸を向け始める。

「悪いが、話せもしない雑魚どもを相手にしている時間はない。突っ切るぞ」

「了解！」

そう言うが早いのか、天海は傘を構えながら群れの中を一直線に駆け抜けていく。運悪く通り道にいた天魔は瞬く間に斬り捨てられてしまうが、最低限の数のみに止めているため、少なくとも数の残党が後ろを追ってきている。

「ガアアッ！」

と、そこへゾンビのように地中から這い出てきた天魔が、鋭い鉤爪で天海に襲い掛かる。不意打ちをとつさに躲すことができず、思わず足を止めそうになる天海。

しかし、それが命中する直前に、天魔はその腕を光弾に消し飛ばされ、攻撃は不発に終わる。

「あたし以外に、カイ先輩を獲らせはしないわ……！」

風沙の放った光線銃が、天魔の腕に命中したのだ。残った身体は後方の水無瀬からの一突きで、大きく風穴を空けられ消滅する。

「済まない、助かった」

「このくらい何てことな……ひゃっ!？」

天海に感謝されたことで油断しきっていた風沙のもとへ、天魔の吐き出した酸の液が飛来する。そこへとつさに水無瀬が傘を開き、風沙を攻撃から守った。

「油断しちゃダメだよ、風沙ちゃん。ここは敵の巢の中なんだから」

「はっ、はい！ すみません……！」

そう言う水無瀬の表情も、突入前の冗談めいたものは異なり真剣なものだった。風沙も改めて気を引き締め、再度走り出した天海に続く。

「神宮寺、親玉の特定はできるか」

『大まかな場所は分かるんですが、特定には至っていません。もしかすると、群れに紛れて攪乱してくる作戦かもしれません』

「化物のくせに、厄介な手を……」

天海は軽く舌打ちして、さらに速度を上げる。風沙は敵を撃ちつつ続こうとするが、彼を見失わない速度を保つとまるで狙いが定まらないため、一旦傘を下げて天海を追うことだけに集中する。

「そっちの状況は？ 中央まで向かえそう？」

走りながら水無瀬が伊勢島らに尋ねるが、返事は芳しくないものだった。

『悪いが、もうちつと時……か……りそうだ。……んではい……んだが、いかせん数が多い……る』

「まだ難しいってことね、了解……天海！ まだ突っ込むな！」

水無瀬が先頭の天海へ叫ぶが、通信のやりとりをしている間に距離が離れてしまったのか、彼は止まる気配もなくどんどん遠ざかっていく。

「ち……ほんと、人の話聞かないやつなんだから」

天海は問題ないかもしれないが、心配なのは風沙だ。まだ戦闘経験も浅い彼女が、群れの中心部で戦えるかどうか。三人ならまだ前後からサポートが出来るが、二人では不安が残る。ましてや盾役の水無瀬ではなく、攻撃役の天海と二人なのがなおさら気掛かりだ。だが、

「グルルウ……！」

「……ってか、ボクもボクで一人だと危ないじゃん。さつさと合流しなきゃな」

いつの間にか、周囲を天魔に取り囲まれている。数的不利が戦況的不利に直結することを身をもって実感した水無瀬は、傘を構えて天魔の集団と対峙する。

「ブン。ボクの前に立ちはだかったこと、後悔させてあげる」

一方、しばらく走り続けてようやく後ろに水無瀬がい

ないことに気付いた天海。通信を繋ごうかと思案したものの、その暇もなくひつきりなしに天魔が沸き続ける。「中心部にはだいたい近づいているはずなんだが……くそ、どこだ？」

天海の顔には焦りの色が見え始めていた。それは今回、偽体破壊の途中で神宮寺がナビに戻ってきたとき、彼に告げた一言が引つかかっているせいもあった。

『……先程、照さんに氣象病の症状が出たんです。それがここで発生している災雲と関係があるのかは分かりませんが……念のため、用心してください』

氣象病の症状を治めるには、その原因となる雨雲を晴らす必要がある。つまりこのゲリラ豪雨を一刻も早く消し去ることが、妹を苦しみから救う唯一の手段でもあるのだ。

「……くそっ！ 親玉め、さつさと出てきやがれ！」

乱雑に傘を振るい、天魔を吹き飛ばしていく天海。その後ろで、風沙は物陰に身を隠しつつ、遠方から射撃して天海を援護していた。

「あーもう！ カイ先輩はなんかおかしくなっちゃやし、亞真理先輩はどっか行っちゃやし！ なんだであたしばかりこんな目に……ふぐっ！？」

戦場の喧噪に紛れて愚痴をこぼしていたその時、突然背後から手が伸ばされ、口元を塞がれる。

「動くな」

耳元で囁かれ、思わず抵抗を止める風沙。もちろん天海の声ではないし、水無瀬や伊勢島、ラムザの声でもない。

「だっ、誰……っ！」

咄嗟に振り返ると、その手が手ではないことに気が付いた。それは、薄紫色のつやつやした身体を光らせる、複数の足を持ったタコともイカともつかないような生命体だった。

「勝手ニ喋ルナ」

もう一つの手、および足が首へと巻き付き、風沙の細い首を締め上げて宙に浮かす。悲鳴を上げることすら許されず、ただ苦しげに顔を歪めることしかできない。

「才前、調停士ダな？ 仲間ハ何処ニ居ル」

「……っ」

おそらく、この怪物が天海の言っていた、ゲリラの親玉なのだと彼女にも予想がついた。話せるほどの知能と、背後から得物を狙う狡猾さを鑑みれば、これが位の高い個体であろうことは一目瞭然だった。

先ほどの手を見るに、この天魔が得意とするのは奇襲だ。手数ならぬ足数が多いこの個体であれば、先手を取ることができれば相手を完封することさえ可能はずだ。きつと自分を人質に取ること、侵入者たる調停士を安全に仕留めることができるという魂胆なのだろうと風沙

は察した。

「あんたなんか、教えるわけないでしょ……！」

ならば、自分に取れる手段は一つ。この化物を刺激して、天海に自ら気付いてもらうことだ。そう確信した風沙は、震える手で腰の傘を引き抜き、光弾を放つ。

「グウオツ……！」

狙いこそ定まらなかったが、至近距離での光弾は目眩ましにも使える。天魔が怯んで拘束を緩めた隙を突き、風沙は物陰から飛び出す。

「天海先輩！ 親玉、ここで……きゃあっ！？」

手を振りながら天海に駆け寄ろうとした風沙だったが、天魔の伸ばした手に足首を掴まれ、再度物陰へ引きずりこまれてしまう。

「ホウ、アレが才前ノ仲間か。サっソク弄ンでヤロウ、と思ツタが」

風沙は足首を掴まれたまま、干しスルメのように逆さ吊りにされる。

「ソノ前ニ、才前ヲ殺ス氣にナッタ。オレガお前ヲまソウな干物ニシテヤロウ」

「……魚介類の自覚、あるのね」

自身ではどうしようもない危機に陥ると、むしろどうでもいいことに頭が回るようだった。干物にするって具体的にどうするのだろうとか、天魔の世界にも干物はあるのかとか、任務にスカートを履いてくることは滅多に

ないけどこんな格好になるならショートパンツを履いていて良かったな、とか。迫り来る魔の手、いや魔の足にも、さして恐怖は感じなかった。

「……あ」

だからその足が目の前で切り落とされても、とっさに助かったとは思えず、ただ「あ、足が落ちたな」と思うくらいだった。その直後、自分の身体が地面に落とされたことで、ようやく事態を飲み込む気になった。

「ナ、ナツ……!？」

刺身のように地面に捨てられた自らの足を見て、わなわなと震え出す天魔。その背後から飛び上がり、脳天を捉えて傘を振り下ろす勇者のごとき姿を見たのは、風沙ひとりということになる。

「ガブアッ!？」

天魔は残った足と手で頭を押さえ、大きな目玉で周囲をぎよろりと見渡す。そして視界に眼帯の男を捉えると、全身を震わせて振動を起こす。

「オレノ……オレノ自慢ノ足ヲ、コンナにシヤガツテ……!」

「それはこっちの台詞だ。俺の大事な後輩を干物になんてしようとしたのはどこの誰だか」

えっ、と風沙は天海の顔を見上げる。その話を聞いていたのか、というのも気にはなったが、それよりその前半が、聞き間違いないんじゃないかと彼女は耳を疑った。

「エエイ、気が変ワッタ! 先ズお前カラ干物ニシテヤル!!」

天魔は長い足を伸ばし、天海の手足を捕らえようとす。天海はそれを傘で打ち返しつつ進み、ぶよぶよした肉体に殴りかかる。

「ギヤアッ!」

何発か打ち込んではいるものの、さすがに親玉だけあり、すぐに倒れてはくれない。対する天海は、今まで小限には止めていたもののザコとの戦いで蓄積した疲れもあり、若干動きに鈍りがあるようにも見えた。

「ク……ナカナカ骨ノ有ル奴ダナ。ダガ……コレはドウだ!」

そう言うって天魔は大きく息を吸い込むと、円形の口から煙のようなものを吐き出した。灰色がかかった霧のようなものに包まれ、彼らの視界は極端に悪くなる。

(……視界の不良なら、五感を使えば何とかなるな)

天海は頼れなくなった視界を閉じ、残りの感覚器官に神経を集中させる。もともと片自分の視力しか使えない彼が不足を補うため、独自に身に付けた能力だ。

「フ、ツイニ見ルコトすラ諦めタカ。食ラエッ!!」

これを好気と見なし、天魔は腹をめがけて足を突き出す。しかし天海はすんでのところでそれを躲し、お返しとばかりに傘を縦に振り下ろした。

「ギヤアアア!？」

この一本の足も失い、怪物は痛み悶える。「クソ、ドウシテ躲セタ……!? 視界ハ奪ツテイタ筈……!」
「相手が悪かったな。俺はその手の搦め手には掛からない」

「クソ……頭ニ来ル奴ダ! キエエエツ!!」

天魔は金切り声のような叫びを上げ、再び足で突きを繰り出す。

「そんな単調な動きで当たるとでも……っ!?」

軽く躲してやろうと身を捻った天海だが、怪物の足は彼に迫り着く前に方向転換し、全く見当外れな方へと向かっていく。その先に居たのは、

「えっ、あ、あたし!?」

すっかり放心しきっていた風沙は、避けることも傘を開くこともできず、ただ立ちすくむしかなかった。

「ケケケ、カカッタナ! 才前ノ油断デ仲間ガ死ヌコト、精々後悔スルが良イ!」

「——ッ!」

風沙は目を瞑り、衝撃に備えた。それがたとえ少女の身体には耐えられない痛みだと分かっているとしても、そうせざるを得なかったのだ。

「……っ、か、は……っ」

しかし、少女は目を開けることができた。あまりの痛みが脳がそれを感じていないのかと思ったが、そもそも彼女の腹は何にも貫かれてはいなかった。それでは、この空気ばかりの呻き声を発しているのは。

「——っ、あ……天海、先輩……?」

それは彼女にとって、自分がこの場で一思いに殺されるよりも、よっぽど悪夢のような現実であった。

見なければならぬが、目を覆いたかった。自分のすぐ目の前で、想い人が腹から血を流し、うずくまっている姿など、一生のうちに一度も見たくはなかった。

「……オヤ、アソコカラ追イ付イタのカ。大シタ瞬発力ダ」
血液の付着した足を戻しながら、天魔は感心した様子で言う。

「シカシ、今才前ガソイツを庇ツテ、一体何ニなツタ? 才前ノほうガ戦エルノハ明白ダロウニ、目先ノ心情ニ囚ワレタばかりニ活路ヲ失うトハ」

「黙れ……化物風情に、何が分かる」
天海は傘に体重を乗せるようにして身体を起こすが、戦ったところで既に勝ち目がないのは明らかだった。かといって、風沙が戦ってもおそらく同じ結果だろう。他の誰かが来てくれれば、あるいは……否、それより先に

戦ったところで既に勝ち目がないのは明らかだった。かといって、風沙が戦ってもおそらく同じ結果だろう。他の誰かが来てくれれば、あるいは……否、それより先に

天海がとどめを刺されてしまうだろう。結果として勝てはするかもしれないが、ここで彼を見捨てていくようなことは、風沙にはできなかった。

「何をしてる……早く、逃げろ、無駄死にする気か」

しかし、ここに残っても彼の言う通り、せつかく身を挺して救ってくれたのが無駄になるだけだ。どうしようとも後悔する気がして、風沙はその場からゆっくりと後退ることしかできなかった。

(どうしよう、何か、何か……私にできることは……っ)

震える手でポシエットを探る。Tell-Tel、ネジ、安全ピン、猫の缶バッジ、お菓子……どれも役立たずのゴミばかりだ。藁にもすがる思いで、底に張り付いた何かを取り出す。

「——！」

『……もし、どうしても困ったときには、そのアドレスと通話を繋げてください。……できれば、天海さんのいない所で』

それは彼女がここへ来る時に、神宮寺から渡された一枚の紙切れだった。奥の手、とだけ言われて渡された、数字の羅列。

『……まあ、天海さんはこれを使うことを嫌っている、ぐらいは言ってもいいでしょうか』

その言葉が頭を過ぎるが、今は手段を選んでいる場合ではない。嫌われるくらいなんだ、彼がここで殺されて

しまうより、ずっといい。

「……お願い！」

風沙は Tell-Tel を手に握ると、勢いよく天魔の反対方向へと駆け出した。通話のボタンを押し、間違えないようにアドレスを音声入力する。

「ククク、逃ゲタか。オ前が命ヲ賭ケテ庇ッタ女ハ」

「……何が可笑しい。それでいい、それでなきゃ、俺が守った意味が、ないだろ」

息を切らし、涙を溢れさせながら、Tell-Tel を耳元へ近付ける。すぐに通話は繋がりが、『はい』と、どこかで聞き覚えのあるような優しい声が届いた。

「……お願い！ 神様でも、なんでもいいから！」

相手が誰かは分からないが、祈るしかなかった。この状況を打破し、天海の命を救ってくれるなら、神でも悪魔でも。

「カイ先輩を、助けて……っ」

とうとう風沙は泣き崩れながら、縋るように声を絞り出す。通話の向こう側の声が、少し遠ざかったように聞こえた。

『——晴域、形成』

へつづく